

JAPAN URBAN DESIGN  
INSTITUTE

## 都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10  
本郷瀬川ビル 〒113-0033

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

# JUDI

---

# 081

20.NOVEMBER  
2004

特集 地場産業と景観

発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

### ●特集: 地場産業と景観

- |                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 1. 地場産業と景観.....                    | 1  |
| 2. 地場産業を使った景観.....                 | 2  |
| 3. HOPE計画における地場産業の扱われ方と今後の方向性..... | 6  |
| 4. 金山のまちづくり.....                   | 8  |
| 5. 山形県金山町の町並みと建築デザイン.....          | 10 |
| 6. ウェールズの黒いまち.....                 | 13 |
- 事務局より..... 16
- 編集後記..... 16

## 特集

1

土田 旭

TSUCHIDA AKIRA

広報・出版委員

株式会社都市環境研究所

## 特集 : 地場産業と景観

地場産材と景観というと、伝統的産業がもつ独特の景観、たとえば焼物の町とか酒づくりの里といった風景が一つある。そしてもう一つは、地元産材による建物と地域の自然的条件を踏まえた地域固有の建て方による建築群のあり様が地域の景観として存在を主張する、そのような関係である。

後者について、建築の主要な部位ごとにみると、たとえば躯体は木材、石、煉瓦などがあり、圧倒的に木造の建物が多い。屋根には板、瓦、石(スレート)、木皮、藁や茅、銅などがある。この中でポピュラーなのは瓦であるが、本瓦葺きや桟瓦葺きなどがあり、また、燻し瓦主体の三州瓦や淡路瓦、釉薬のかかった赤瓦で有名な石州瓦などがあり、とくに石州瓦の家並は地方色豊かである。上記の地域が瓦の主たる産地といえるが、このほかの各地でも地産地消で瓦はつくられている。壁は板、土(しつくい)が主だが、組積造として石や煉瓦なども使われていた。土壁にしつくいを塗った白壁と瓦下見の組合せは各地でよく見られるが、しつくい壁一つをとっても土佐漆喰のように高度な技法を駆使したものもある。床には板と畳のほか石、磚、たたきなどもある。外観の印象としては造作が効いているが、その多くは木と紙が多く、特別な場合(蔵造りなど)に土としつくい、金属板などで防火性を増している。

過去には地域の材料が入手しやすく、また安かつた。できるだけ地元の素材を使うため、加工や工法にも工夫することで個性豊かな多様な民家が生まれたが、今日ではあまり地場産材と在来工法に拘りすぎると高いものにつくようで、その辺りのかね合いも難しくなっている。ともあれ、こうしてでき上がったまちなみや里の風

景は限られた素材で共通性が生まれ、かといって少しずつ違った表情をもちつつ地域景観の一部となっている。一方、例えば酒造や味噌、醤油といった醸造を行う建物が、鉄骨造の上屋では、合理的かもしれないが、味気ない。ここではやはり木造の大架構か蔵造りが似つかわしい。焼物の町でも、陶片が道や壁などそこかしこに使われた風景を見てこそ町を訪れた甲斐があるというものだ。

話は変わるが、景観法の成立の中で、美しい里や美しい都市をどう守り、育て、創りだしていくかが、大きな課題となっている。ここにごく普通のまちなみをどのように整えていくかがポイントになるだろう。商店街などでは、商店街振興あるいは観光の目玉にするため、デザインガイドラインを設けて、できるだけそれに沿うかたちでの改築改装をすることが行われてきた。しかしそのコンセプトはプロバンス風だったりエーヴィング風だったりあるいはモダーンだったりして、地域性に配慮していないか、全くその逆で城下町や宿場町のまちなみを再現しようとしているにとどめつけたようなものにしてしまうケースが多い。住宅地でのまちづくりのルールを建築協定や地区計画でみると、建築の形態やデザインあるいは材料にまで言及しているのは、よほどの場合だといつてよい。都市環境デザインでの検討課題の一つに、普通のまち、まちなみをどのように誘導していくかがある。そのさいデザインガイドラインがおそらく必要になるが、共通理解の得やすいデザインガイドラインをどうつくり、どのように運用するかが重要である。地域資源、地域産材を活かしたまちづくりの事例のなかに良いヒントがあることを期待したい。

## 地場産業を使った景観

近田 玲子

REIKO CHIKADA

近田玲子デザイン事務所

各ブロック幹事にお願いし、その土地特有の地場産材を使った景観を集めてもらった。依頼内容としては、地場産材を使った景観の写真3点以上。写真には、都市名、材料名に加えて、景観評価項目を150字程度にまとめた説明文を添付するというもの。

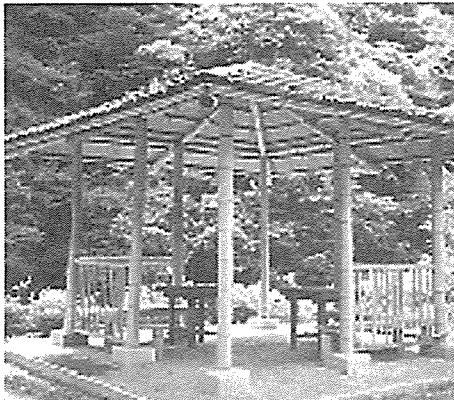
依頼に応え、かなりの数の画像が送られてきた。JUDI会員の資料として大いに役立つものと考える。今回の特集をきっかけとして、今後とも「地場産材を使った景観」の収集をブロック活動の一つに加えていただければ幸いである。

本田 寿

HONDA HISASHI

本田寿建築設計事務所

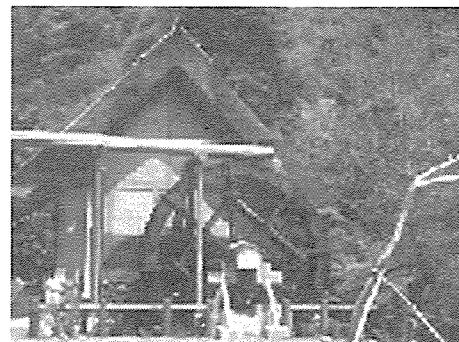
愛媛県城川町の三滝渓谷にある水車小屋です。城川町の山々に生えているカヤを集め、屋根に葺いています。木材についても山で産出された桧材を使用しています。



愛媛県伊予郡広田村にあるあずまやです。広田村にて産出される孟宗竹をあずまや軸組みに使用し、屋根は杉皮葺としています。



・水車小屋



・水車小屋

○都市名:那覇市

○材料名:琉球石灰岩

○評価項目:琉球王国の時代から石垣や床材などの建材や舗装材、墳墓材等として利用されている琉球石灰岩は琉球の石造文化に欠かせない材料で今日に至っている。国内外から輸入された諸石材が多く利用される中、沖縄らしい景観形成のためには琉球石灰岩の幅広い有効利用は今後も促進すべきであると考える。



・琉球石灰岩



・琉球石灰岩



・琉球石灰岩

石嶺 一

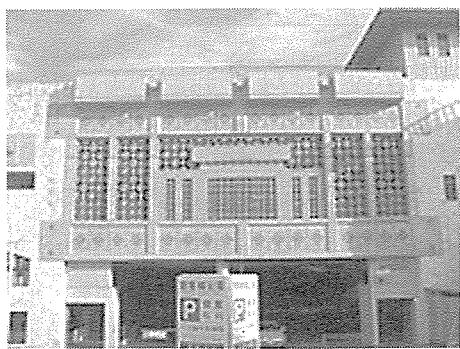
ISHIMINE HAJIME

(株) 沖縄計画機構

琉球ブロック幹事

翁長秀正  
Onaga Hidemasa  
(株) 沖縄計画機構

○都市名:那覇市  
○素材:花ブロック(コンクリートブロック)  
○評価:沖縄の花ブロックは、強い陽射しを和らげ室内にやさしい光(影)を取りこむ装置として用いられている、省エネ効果も高い。近年では、様々なデザインの花ブロックが建物の壁面を飾るなどデザイン性の高いものが見られる。写真は首里城公園駐車場入口の装飾で、首里城にある門をモチーフにしたデザインが施されている。



・花ブロック

木下能里子  
KINOSHITA NORIKO  
(株) なむ環境創造

○都市名:糸満市  
○素材:赤瓦を組み込んだ舗装タイル  
○評価:沖縄では赤瓦の屋根が特徴的な景観を形成してきたが、新たな使い方も模索されている。また、コンクリートもRCの建築物が圧倒的に多く、骨材に地場石灰岩を使うため他地域よりも白っぽいという特徴があることなどから、すでに地域素材としての感がある。



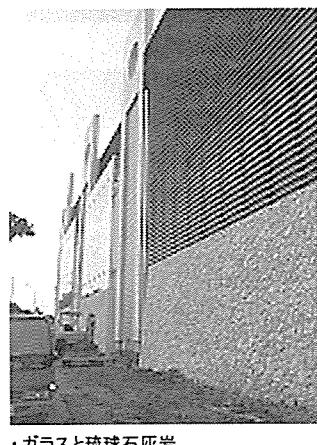
・舗装タイル

前原 信達  
MAEHARA NOBUTATSU  
株都市科学政策研究所

○渡名喜島のゾーンジャキ(ヒンブン)  
○都市名:渡名喜村  
○材料名:自然のテーブルサンゴ  
○評価:沖縄の伝統的家屋は一般に玄関を設けない。屋内と庭とはアマハジ空間を通して緩やかにつながっている。そして、公道から家屋内への視線を遮るのがヒンブンである。写真にみる自然のテーブルサンゴを積み上げ赤瓦をのせたヒンブンは県内でも稀少。今後、多面的に活用が期待できるデザインとして価値が高い。



・テーブルサンゴ

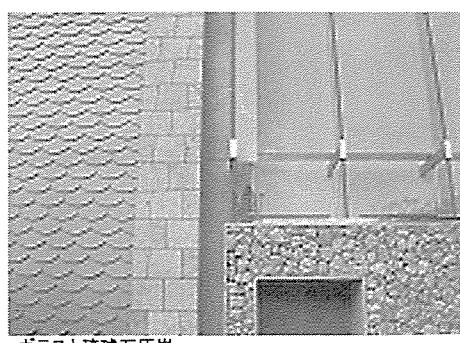


・ガラスと琉球石灰岩

○那覇市おもろまちのDFS  
○都市名:那覇市  
○材料名:琉球石灰岩  
○評価:近代的なガラスと金属製素材の中に、伝統的な琉球石灰岩を2種類の表面仕上げで取り入れている。琉球石灰岩を野面積み風に使用して下部の安定した重厚さを醸し出すとともに、表面を矩形加工して垂直に積み上げたデザインが、ガラス・金属素材の軽快さと相まって優れたデザインを創出している。店舗建築への琉球石灰岩の活用が近年多くみられる。



・ガラスと琉球石灰岩



・ガラスと琉球石灰岩

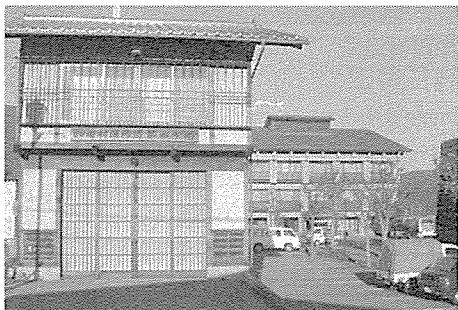
## 高見公雄

KIMIO TAKAMI

(株)日本都市総合研究所

### ○長野県和田村

長野県和田村では、中山道和田宿の面影を活かしたまちづくりが進められている。村庁舎(写真奥)の建設にあたっても、鉄筋コンクリート製の本体について、外装部に地場産の木材が多用された。長野で活動する宮本忠長さんの設計による建物であり、氏はこのような手法を県内で多く展開している。手前に見える消防団の建物と調和した和みのある景観を造り出している。



### ○世田谷区駒沢

大谷石は、関東の代表的な地場産材と言えると思う。産地周辺の小野口家住宅等、大谷石による蔵等の景観は高名であるが、東京の中にもポイントとしてはある。写真はF. L. ライト設計による林愛作邸であるが、駒沢公園の近く、公道から見える位置に、いかにもライト然とした建物を大谷石が引き締めている。

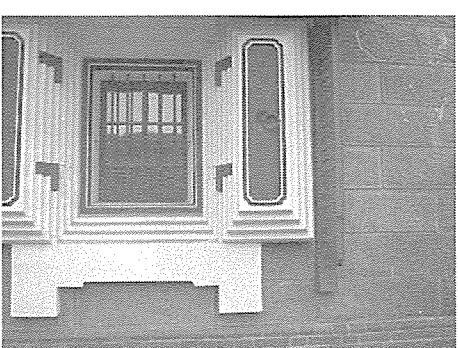


### ○札幌、江別／煉瓦

北海道における煉瓦の歴史は明治5年函の茂辺地に開拓使が煉瓦工場をつくった事に始まるが、その後札幌と幌内を結ぶ鉄道に煉瓦橋が使われたことから、札幌郊外の白石、江別に煉瓦工場が造られ、建築にも広まっていく。江別は日本でも有数の煉瓦産業の街として根付き、現在も小中学校などの公共建築、住宅にも煉瓦やセラミック系の材料が広く使われ、地域性を表現できる景観素材となっている。写真は札幌の「赤煉瓦」の愛称で親しまれている旧道庁庁舎。

遷を読むことができる都市考古学の貴重な素材でもあることがわかった。

写真は函館元町界隈の下見板建築の街並み。



・煉瓦

○小樽、札幌／軟石（小樽軟石、札幌軟石）  
小樽運河沿いの石造倉庫の外壁として有名な軟石が、北海道で始めて使われたのは、煉瓦と同じく、明治初期のお雇い外国人の進言による、開拓使の洋風建築を嚆矢とする。しかし、この素材を街の顔となるほど、十二分に使いこなしたのは、幾たびかの街の大火に悩んでいた小樽の商人たちであった。うだつを構える商家、港の倉庫から始まり、商社や銀行建築まで、小樽最盛期の街並みをこの素材が彩つていった。写真は街中の残る邸宅の軟石造の蔵。

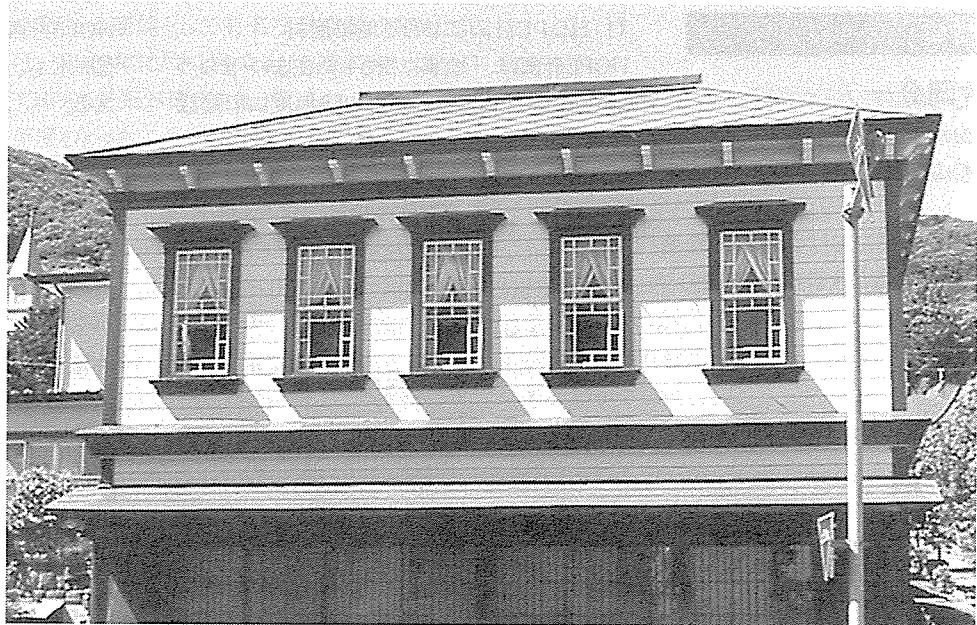
### ○函館、札幌／ペンキ塗り下見板

北海道の洋風建築のもう一つの顔が、豊平館や函館区公会堂の鮮やかなペンキ色彩で塗られた下見板外壁である。下見板は上げ下げ窓とともに、洋館の最もポピュラーな記号であるが、函館元町界隈の洋風民家の下見板は、塗り重ねられたペンキ層から時代の色の変

## 柳田良造

RYOUZOU YANAGIDA

プラハアソシエイツ(株)



・ベンキ塗り下見板

長江  
NAGAE

### ○能都町・新町通り商店街の歩道整備について

平成15年度には、新町通りの海側の一部の電線類の地中化工事と、歩道整備が完成しました。(石川県事業・街なか再生目抜き通り整備事業)

歩道の整備にあたっては、「縄文の息吹を感じる人と自然にやさしい素材によるみちづくり」をコンセプトに、歩道の舗装材や街路灯・足元灯のデザイン検討を行いました。

(1)歩道舗装材の検討＝自然界の「土」「緑」を取り入れた舗装

- ・歩道の舗装材は透水性の擬石平板を使用
- ・擬石平板には、能登の地場の素材である「能登石」を混入
- ・能都町内の小学生に、鋳物レリーフを製作し

てもらい、歩道舗装の一部としてはめ込んだ。平成16年現在、約100ヶの鋳物レリーフがはめ込まれている。

(2)街路灯のデザイン＝縄文のやさしさを感じる土器のあかり

・間接照明型により人やまちにやさしい夜景を演出

・地場の「能登石」を土台に使用

・縄文出土品である真脇式土器を灯具にデザイン

・アクセントとして、縄文人が製作した石板を、沿道商店街のおかみさん会が製作しはめ込む

(3)足元灯のデザイン＝縄文の祭祀がよみがえる環状木柱のあかり(足元灯)

・縄文出土品である「巨大柱根」をデザイン  
・縄文の祭祀の厳かさ、華やかさを演出



## 片岡公一

KOICHI KATAOKA  
(株)山手総合研究所

### HOPE 計画における地場産業の扱われ方と今後の方向性

#### (1) HOPE計画における地場産材

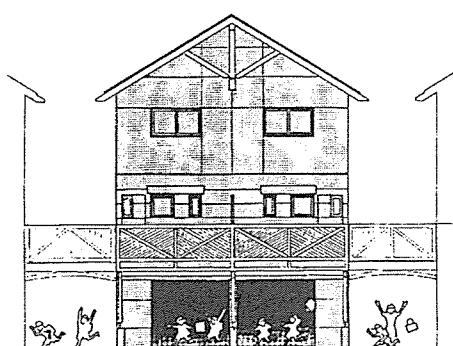
HOPE計画は、「地域に根ざした住まい・まちづくり」を進める制度として昭和58年度に旧建設省において創設された。HOPEというのは、Housing with Proper Environmentの頭文字をとったもので、それぞれの地域の気候・風土、伝統、文化、地場産業などを大切にしながら、地域の発意と創意により住まいづくり・まちづくりを推進することを目的にしている。平成14年時点では、全国で延べ430件の計画が定められている。

その中で、地場産材がどのように扱われてきたかというのを示したのが以下の表1である。この調査は、旧建設省住宅局住宅整備課監修の「HOPE計画～地域に根ざした住まい・まちづくり 地域住宅計画」から、材料に関する記述を抜き出すことで行った。

(注)この資料は、昭和58年度から平成11年度策定のものまで、毎年まとめられているが、全ての策定自治体の概要が掲載されているわけではなく、自治体から資料の提出があったもののみ掲載されている。また、掲載内容は各自治体によって作成されており、客観的に取り組みを分析したものではない。しかし、掲載件数は平成11年度までに策定された409件のうち、346件が掲載されており、全国的な傾向を知る上では十分な数といえる。

#### クロス分析結果

- ・掲載されている事例のうち、55%に材料に関する記述が見られる。また、掲載件数の35%に地場産材に関する記述が見られる。
- ・施策の目標や計画などの主な項目として材料をあげている事例は、掲載件数のうちの30%にあたる。
- ・景観として地場の材料を扱っているものは、掲載件数のうちの約25%となる。
- ・扱われている地場材料は木材が一番多く、次いで瓦や石、レンガなどとなっている。
- また、ここには詳しいデータは掲載しないが、HOPE計画の中で、地場産材の活用は、大きなテーマのひとつでもあり、年によって材料を扱っている事例の少ない年はあるが、全体を通してみると経年的に顕著な変化はあまりない。



・図 吉野の家イメージ

HOPE計画の扱われている件数を考えると、全國的にも、地場産材が重要なテーマであるといえる。

#### (2) 地場産材と景観との関係

表1を見てみると、(A)「景観」という視点で地場産材を扱っている件数よりも(B)「景観としては地場産材を扱っていない件数」のほうが件数が多い。HOPE計画で材料を取り上げている件数の約1/4は地場産材の活用を景観という視点からも扱っている。しかし、地場産材を景観という視点から扱っていない自治体は、それよりも多く1/3以上となる。後者では、住宅という「建築レベル」では地場産材の活用を考えているが、「まちレベル」では考えていないということになる。

実際に行われている施策を見てみると、(B)は公営住宅などで地場産材を使うというものなどが多く、単発型であることが多い。

金山での取り組みを筆者なりに分析してみると、成功しているとされる要因のひとつとして、景観の取り組みと、産業振興の取り組みがうまく連携していることがあげられるだろう。地場産材を景観という視点で取り扱うことにより、数多くの利点が生まれている。

具体的には以下のようなことがある。

- ・デザインの質の担保(見た目に格好がよいか)
- ・公的な施策の中で、景観というフィルターを通して、地域外のものとの差別化を図ることができる。
- ・産業振興としてのみで取り扱っていくよりも、より幅の広い層の参加が得られ、市場形成に役立つ。

HOPE計画に関する調査の中で、地場産材を景観として取り扱っていない自治体の中には、単なる住宅マスターPLANと考え、住宅単体でしか地場産材を取り扱おうとしているものが多い。そのような自治体に関しては、「景観」という視点でもって、地場産材を捉えなおすことも必要であろう。

一方で、景観という視点から取り扱おうとして、うまくいっていない自治体も多い。実際にHOPE計画では「景観」と「地場産材」の関連が述べられている自治体でも、その後の計画の実施状況を見てみると芳しくないところも多い。そのようなところでは、何が問題なのであろうか?また、解決の方向性としてどのようなことが上げられるのだろうか?

#### (3) 計画の実行性

ひとつには、計画そのものの実行性ということが挙げられる。

#### (3-1) 奈良県吉野町

吉野杉の産地として有名な奈良県吉野町では、平成3年に「木と住文化」を基本テーマとしてHOPE計画が策定され、平成4～6年が推進年度となった。

このHOPE計画の中では、住宅内部のことから町全体のことまで、様々なレベルにおいて具体的な計画が策定されている。しかし、行政へのヒアリングによると、現在、HOPE計画に基づく街並みづくりは実現しておらず、吉野の素材を使った「山灯りコンテスト」という照明のコンテストにとどまっている。(もちろん、この照明のコンテストは高く評価されているものである)

このHOPE計画では、「吉野の家」という住宅モデルの開発と、修景プランとの関係が考えられておらず、「吉野の家」が、吉野の景観・風土の中でどのように実現されていくかという戦略が示されていない。また、「吉野の家」の構造 자체もツーバイフォーで、「吉野ならでは」というものが感じられず、ハウスメーカーとの差別化がはかりにくいのも問題であったと考えられる。結局、高級材の吉野杉を地元の一般的な住宅で使うというハードルは高く、HOPE計画以後、吉野ならではの住宅の取り組みはほとんどなされていない。

### (3-2) 金山との比較

一方で、金山のまちづくりを見てみると、計画の実行性を高めるために様々なことが行われてきていることがわかる。その中でも重要なのは、材料の生産業者や加工・建築業者(大工など)のまちづくりへの参加である。

一般的に、住宅を建てようと思った施主は、自分の要望を業者に伝えた後、その業者から示されたプランの案を取捨選択することで住宅を建てていく。どのようなデザインにするかは、一見、施主の自由であるように見えるが、実は、業者がどのようなプランを施主に対して提示するかに大きくかかわってくる事がわかるだろう。地場産材とまちづくりの関係を考えたとき、施主に対して、地場産材を使った建築を提案できる業者がいるかどうか、というのが、実は大きなボトルネックなのである。

また、外部の専門家や建築家が、自己主張しすぎないというのも、計画の実行性というものに大きく関わってくる。特に、まちづくり、景観づくりという視点から地場産材を扱っていこうとした場合、前述のように実際の景観をつくり出していくのは地元の職人であり、それらの人の得意な部分を見極め、その技術をベースにどのように地場産材を扱っていくかということを考えなければ、地元に根付くことはないだろう。吉野と金山の違いはここにある。

### (3-3) 行政の「公平性」の克服

地場産材を扱っていこうとしたとき、行政の「公平に扱わなければならない」という倫理観が大きな障害となることがある。例えば、地域内と地域外の材料をどこで区別(差別)するか、さらに、地元材料業者などが少数となった場合(特に1社のみとなった場合)、その企業だけを優先してよいのか、という問題にぶつかる。

現在、地場産材活用の為にHOPE計画でとられている手法は、主に

1. モデルケースとして地場産材を使った公営住宅を建設する

2. 「〇〇型住宅」という地域住宅のモデルタイプを作り、その中で地場産材の使用を啓蒙していく

### 3. 職人養成

といったことである。行政の「公平性」という問題点に対して、1. や2. の手法のみでは解決できない場合が多い。一見遠回りに見えるが、「生産・加工・建築業者のまちづくりへの参加」により、間接的に地場産材の活用を勧めていくことが、実は近道なのである。ただし、「職人の参加」のためのまちづくりのノウハウというものは、これから蓄積していくべき部分であろう。

### (4) 計画の継続性

一般的にまちづくりにおいて、計画の継続性というのも重要であるが、地場産材を用いた景観形成を行っていく場合も重要である。特に、HOPE計画に関していえば、計画策定期間と推進期間も含めて長くても数年である。したがって、推進期間を終了した後は地元の自治体がしっかりとしたイニシアチブをとり続けていく必要がある。

その際に一番問題となるのは、行政の担当者が数年で変わってしまうという日本の人事制度である。金山では、行政の担当者、外部の専門家とともに、長期にわたって一貫してまちづくりにかかわっており、そこが、他の自治体との大きな違いとなっている。

また、地場産材というものは、得てして全国の流通材料より、価格が高い場合が多い。地場産材に地元の人が価値を置かなければ、地場産材の活用はなされない。金山も住宅建設シンクールの創設から、既に26年も経ている。このように、価値観の形成には長い時間がかかるものであり、そのためにも計画の継続性とそれを支える社会システムが必要である。地場産材の活用という分野においては、長期間にわたって、住民だけではなく、生産・加工・建築業者の価値観の形成をはかり、文化を育てることが重要な施策となるのである。

## 藤山一栄

KAZUEI FUJIYAMA

金山町産業課商工観光係長

金山のまちづくり

### (5)今後必要なこと

現在、景観法の制定や、住宅マスター・プランのあり方の見直しという動きがある。そのなかで、HOPE計画で取り扱われているような地域性という概念が、今後ますます注目されていくことだろう。

地場産材の活用は、地域経済の活性化にもつながる。しかし、最近はハウスメーカーの地域への対応も進歩ってきて、一見「地域住宅」風の住宅を建てることもできるようになってきており、「地域住宅」という型だけを作るだけでは、地域への還元はなくなる可能性がある。地場産材の活用を行っていくためには、表面的な景観ではなく、それを支える仕組みが重要なのは誰が見ても明らかである。

また、現在、HOPE計画を公営住宅建設の補助金メニューとしてしか考えていないような自治体も多く見受けられる。しかし、本来のHOPE計画の良さは、「誰が」何をやるのかというのも含めて計画策定・事業実施をできることにあ

る。地場産材の活用を行っていくためには、HOPE計画の本来の長所を更に発展させ、計画の実行性と継続性を高める仕組みづくりを行っていく必要がある。

地場産材の活用は、一朝一夕でできるものではなく、長い時間をかけて、地域独自の「まちづくり・景観形成の文化」を創り出していかなければならない。世間では景観法が取りざたされているが、このような景観への意識の高まりという機会を逃さず、地域独自の景観を再認識し、地場産材活用のためのバックグラウンドを戦略的に創り出していく必要があるだろう。

#### (参考文献)

「吉野町HOPE計画」奈良県吉野町企画課 1992

「ひとと木のまちづくり計画」同上 1993

「吉野町HOPE住宅マニュアル」同上 1994

「住まいとまち並みの修景プラン」同上 1995

※本稿は片岡公一の東京大学学位論文『材料のまちづくり』を通じた街並み文化の再生に関する研究を再構成したものです。

### 金山町（かねやままち）とは

山形県の北東部にあり、秋田県と一部県境が接する人口7,300人、面積約160km<sup>2</sup>の小さな町です。町の面積の65%を山林で占めており、夏は高温多湿、冬は多雪の気候風土から「金山杉」と呼ばれる上質の木材が町の特産となっています。

### 町の風景

文明開化の明治初期、東北を訪れた英国人旅行家イザベラ・バード女史が当時の金山を「険しい尾根を越えて、非常に美しい風変わりな盆地に入った。ピラミッド型の杉の林に覆われ、その麓に金山の町がある。ロマンチックな雰囲気の場所である。」と記しています。今もその風景は変わらず、国道13号を北進し、新庄市と金山町の境である上台峠を越えると、突然に視野が開け、金山町の風景が広がります。整然と続く田園、清らかな流れの川や緑眩しい山並み、杉と白壁を基調とした家々、それらのやさしい眺めは、いつか心の奥にしまい込んだセンチメンタルな郷愁やロマンをかきたててくれます。

その昔、秋田を結ぶ羽州街道の宿場町であり、ところどころに往時の風情を感じさせる切妻屋根に木組みの柱と白壁、下見板張りといった木造住宅が続いています。

### 景観共有論

金山町では、景観づくりを町づくりの大きな柱として明確に位置付けており、「景観とは、個人の所有に帰属するものでなく、公共的なものである」という【景観共有論】を前提にしています。

美しい景観とは、個々のものもある基準に基

づき統一的に整備し、全体として調和のとれた景観を指しています。しかも、見た目の美しさだけでなく、生活するのに快適でなければならぬとしています。

景観づくりは、住民の高い意識と自主的な精神に基づいて行なわれる住民運動としての側面を有しており、その根底は町づくりに直結するものであります。

また、景観づくりの主要な部分となる家並みは、「金山型住宅」と呼ばれる在来工法を基本とした住宅産業との関連が深く、その延長線上には、金山職人の技術の向上や後継者育成、更には木材消費の拡大、林業の総合的振興といった分野が見えてきます。

すなわち、景観共有論を前提としながら、地域の資源を最大限に活用し、地域住民と行政が一体となって進めるまちづくり活動と言えるものであります。

### 川上の責務

金山町は地理的に水源地の町です。したがって、川上に住む者の責務として昔から水をきれいにしよう、町をきれいにしようという思いが受け継がれています。このことが景観づくりの根底となる要素になっています。

### 景観づくりへの危機感

昭和40年代から50年代にかけて、町の風景が変わってきた時代でした。建築メーカーのプレハブ工法などの進出により、茅葺や杉皮葺きの屋根が鉄板屋根に変わり、外壁も塗り壁・板張りが鉄板系へと急速に変化してきたことにより、ロマンチックの街並みが失われかけようしていました。更には、代々受け継がれてきた金

山職人の匠の技を捨て去ろうとしていた時代でもありました。

こうした背景から、「金山町住宅建築コンクール」を昭和53年度から実施しております。

#### 住宅コンクールから景観条例へ

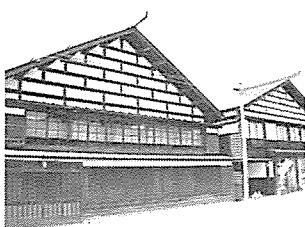
前述、住宅コンクールを開催したことにより、金山職人の技術の向上はもとより、金山杉をふんだんに使った金山スタイルの建築様式が確立されてきました。

昭和59年には東京藝術大学の協力を得て「HOPE計画」を策定し、現状調査・分析・指針をまとめあげました。

これらが基礎となり、景観づくりを更なる住民運動に展開すべく、翌年の昭和60年度に「金山町街並み景観条例」を制定し、建築物や工作物に対する形成基準を設け、助言や指導・援助体制を整えております。

#### 金山町街並み景観条例

条例の序文には「わたしたち町民は、この町民の共有する貴重な財産である金山らしい街並みや自然を保ち、さらにつくりあげて後世に引き継ぐことがわたしたちに課せられた重大な責務と考える」と記し、街並みが私有物ではなく、共有すべき公的な財産であることを明確にしています。また、まちづくりは行政が規則規制で進めるのではなく、あくまでも住民が主役で



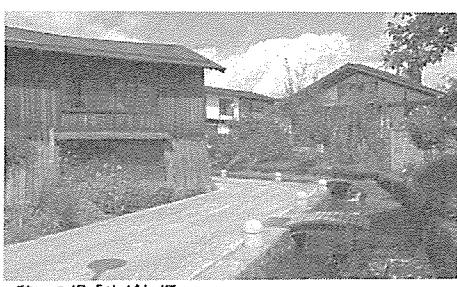
・金山型住宅原型



・生活空間



・金山職人



・憩いの場「めがね堀」

あり、行政と住民の連携と協調、信頼のなかでのまちづくりを目指すことから罰則規定は設けていません。

形成基準の基本理念は「町全体を風景としてとらえ、周囲の自然や歴史的資産が美しく見え、かつ住民が住みやすく、風景と街並みが調和する美しい町を形成する」としています。この形成基準に合致した物件には、最大50万円の助成金制度を設けており、昭和61年度から平成15年度までの18年間で、累計助成件数は870件、助成金額は161,524千円となっています。

#### 景観づくりが経済効果へ

金山町には独自の景観条例があることによって、大半が町内の建築関係者が施工しております。住宅産業に携わる職人が多い金山にとっては、大きな経済的(産業的)要素となっております。

言い換えるれば、金山の景観は町の職人が築き上げてきたものであり、歴史を刻んでいるものであります。

#### 景観づくりのコンセプト

美しい町づくりは「終わりのない施策」であり、人の手によって良くも悪くも制御できるものであります。金山町は、昭和40年代から東京藝術大学建築科関係者の指導をいただきながら今日に至っております。100年先の金山を見据え、同じコンセプトで着実にまち(景観)づくりを進めてきたことが、町の資質を高めている大きな要因となっています。

#### 街並み(景観)づくり100年運動

これまで述べてきたように、金山の景観づくりは、先人が築いてきたものを守り、継承し、推進してきたことで今日があります。町民の「理解と共感」を基本にまちづくりを進めてきたことにより、東北の小さな田舎町が全国的に評価されるようになってきました。これは、行政が評価されたのではなく、町民が評価されたものであり、「金山型住宅」も町の職人が築き上げてきたものであります。したがって、すべての主役は町民であります。これから景観づくりを住民運動として継承していくことがわたしたちに課せられた責務とし、あくまでも軸足は町民においてまちづくりを進めるものであります。100年後の金山を想像しながら…。



・将来のイメージ図

## 片山和俊

KAZUTOSHI KATAYAMA  
東京芸術大学美術学部建築科

## 山形県金山町の町並みと建築デザイン

金山町の町づくりの概要は、藤山氏が前項で書かれる予定なので、ここで私は空間デザインを中心にして述べてみたい。

## ●期待がはずれた！

これからアーバンデザインが来ると期待に満ちた時があった。私が芸大の大学院の頃(1960年代末)だが、K.リンチの「都市のイメージ」を読み、C.アレキサンダーの「パターン・ランゲージ」にかぶれ、ロンドンの再開発地計画に目を見張った。けれどもその後、都市計画と建築の分野が分化しはじめ、都市計画では空間デザインが付録のように扱われ、建築では単体のデザインが中心となって、都市的な広がりすらも巨大な建築で解くような時代が続き、今日に至っている。

その状態を単純化し視覚的に表現すると、都市計画と建築デザインという二つの山が別々に育ち、その狭間から大事な分野が抜け落ちてきたように見える。近年の町づくりや景観という問題の噴出は、まさにその狭間へのブーキングということであるだろう。本来ならば二つの山の中に含まれていなければいけないことなのだ。

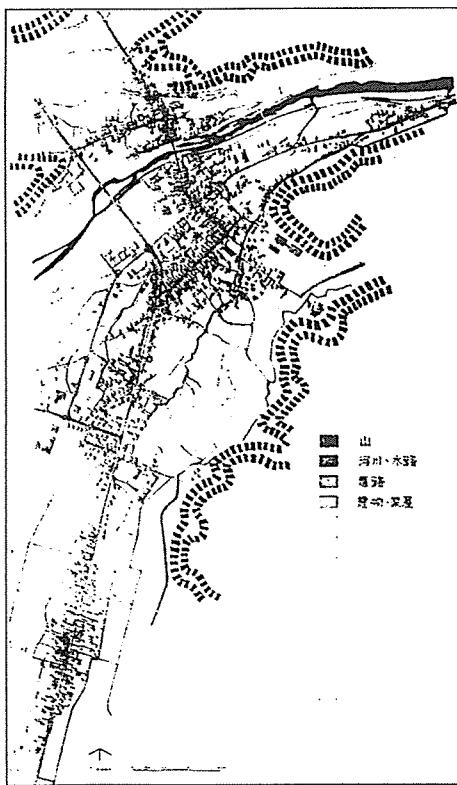
金山町の計画に携わることができたのは、二つの山が分化し始めた時期であり、高度経済成長のつけが回り、現在の状態が予見される平準化した町並みや暮らし方が日本各地に現れた時期に重なる。HOPE計画が発想された頃である。

## ●金山町で試みたこと

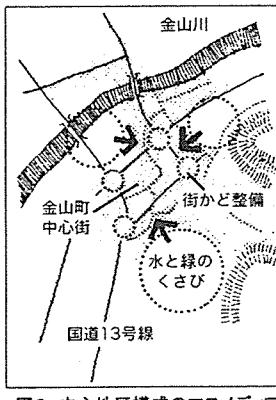
金山町は、丁度二つの山、都市計画と建築の間の環境的スケールをもつ町である。巨大で複雑な都市計画の範囲でもなく、かといって建築デザインを拡大しただけでは解けない規模である。そしてどう捉えるにせよ、豊かな自然と伝統的な家屋が織りなす美しい背景に応える空間的なデザインが問われる計画であった。まさにアーバンデザイン、アーバンという言い方が適切でなければ、環境的スケールの分野であった。(図1、2)

当時の金山町には、伝統的な家屋や蔵が多く残ってはいたが、保存によって全体の町並みを成立させるほど圧倒的ではなく、かといって伝統的な家屋との関連を軽視しては全体の調和が保てない状態にあった。そして何よりも町は生きており、新築や建て替えが多く、常に町並みが変わっていくと予想された。従って我々が考えた方針は「守りながら作る」「作りながら守る」であり、その基調を美しい周囲の自然と伝統的な家屋に置ぐものであった。また木材と技術をこれからの町と住まいづくりに生かすという方針は、林業と大工の金山町に相応しい発想であった。

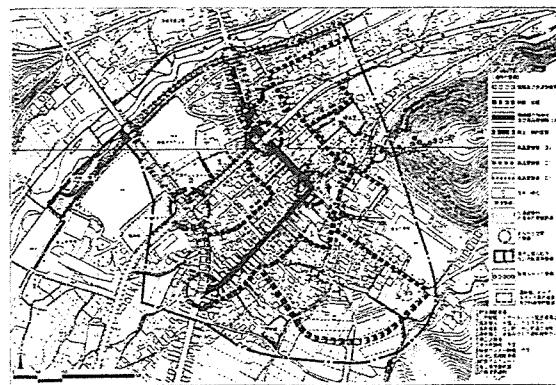
また景観という言葉には、表装的な意味合いが強く感じられ、単なる外観の化粧で終わってしまう危険性がある。金山町の計画では、町並みや住宅の外部だけでなく、町全体の環境と住宅の内部までをも対象とする「トータルデザイン」を目指している。



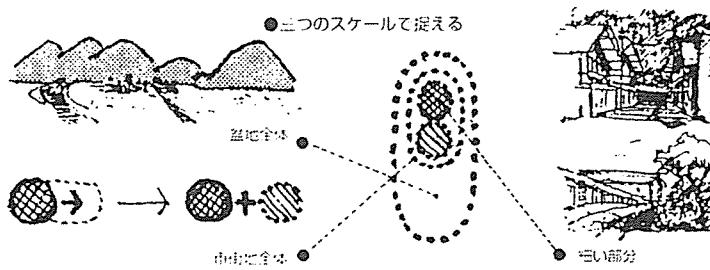
・図1 金山町の構成



・図2 中心地区構成のマスメディア



・図3 中心地区のまちづくりマスター・プラン



・図4 金山町と環境的スケール

## ●計画の組立て

計画は二つの段階からなる。一つは町全域の広がりに対して、二つは町の中心に対しての計画である。町全域に対しては、

### ・同質の点を増やす「風景と街並景観条例」

小さな金山町でも町域は広く、山並、杉木立、田園、金山川と水路、そして家並と、家屋には様々な立地環境がある。その何処にあっても風景や環境と調和し、風景を妨げない家屋を増やすことが必要と考えられた。この条例によって同質な点が増え、やがて面に広がる。点としての家屋のデザインは、ここでは風景の中で邪魔にならない、気にならない程度の外観上の質を保つことに、制定の主眼を置いている。(図5)また条例の条文は、細かく規定するよりも、分かりやすく単純にしている。屋根の色彩も、当初は焦げ茶、シルバーなど数種していたが、数年後に焦げ茶と訂正した。数色混在よりも単色の方が良かったという実績からの判断である。また分かりやすくするために「建築物等整備ガイドライン」を設けている。(図6)

条例を制定して18年なるが、この助成金支出が平均850万円／年で2000万円の建築費とすると、毎年約4億円の公共事業を行ってきたことになる。町内技術と素材使用により、経済が町内循環することが分り、このことは特筆されてよい成果と思われる。

### ・点の質の向上を図る「住宅建築コンクール」

金山は杉と大工の町である。しかし出稼ぎが多くかつた頃に、大都市での建築経験と情報が

必ずしも良い結果をもたらさないことが判明した。様々な建材、便利な構法や設備機器そして氾濫するカタログ情報の安い採用が、町の大事な資質を放棄することにつながり兼ねないマイナスのサイクルが明らかになった。良質の杉材と腕のよい金山大工を見直すために始められたのが、このコンクールである。年間に金山大工が施工した住宅を対象に、住民と建築専門の審査委員が現地審査を行い、表彰する制度である。(図7)

これは大工や発注者である住民の励みになるとともに、どういう住宅が求められているかを広く知らせる機会となり、風景と街並み景観条例の補完的な役割を果たしている。審査では、外観だけでなく平面プランや内部構成など生活空間全般に亘って論議されている。

一方、町の中心地区に対しては

### ・中心地区的マスタープランを作る(図2)

金山町は、広大な自然とコンパクトな中心地区とのバランスの上に成立している。豊かな自然に見合った中心市街地の魅力が必要である。初めに詳細な物的環境調査を行い、特に伝統的な住まいの特徴を備え、将来の核となる基準になりそうな家屋については、建築実測調査を私の大学の研究室で行った。それを下敷きにマスタープランを作成した。その中で既定の“全町公園化構想”的具体化を試み、例えば家屋跡地等を、単なる空地として放置するのではなく、町の拠点やネットワークに組み込んでいく柔軟性をもった計画を立案した。また一

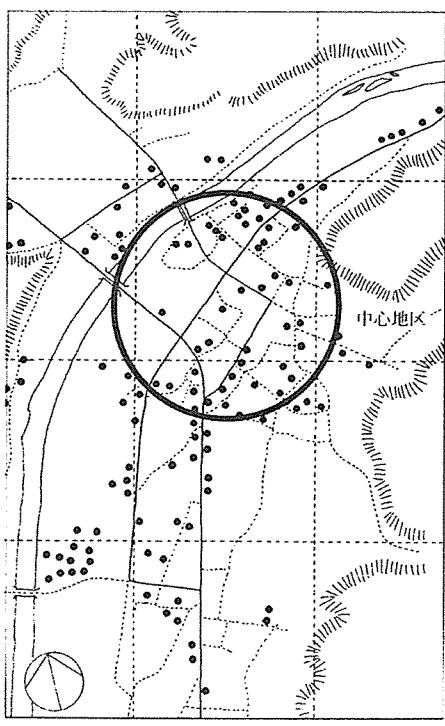


図5 景観条例助成金支出家屋(新築)分布

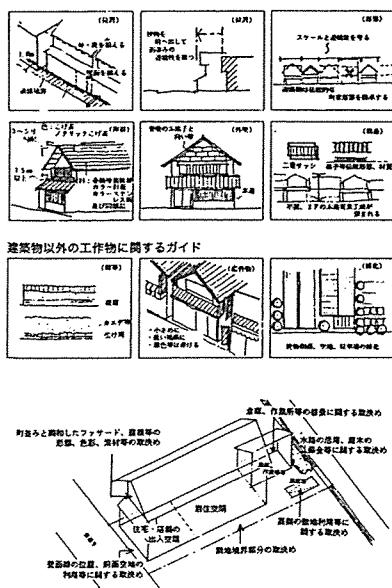


図6 建築物等整備ガイドライン

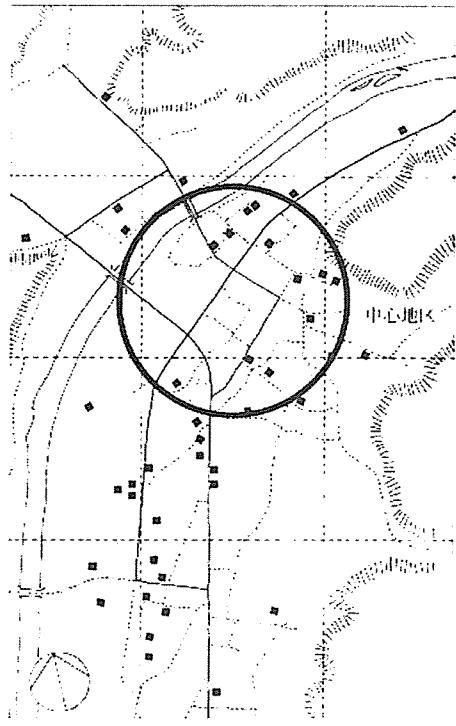


図7 住宅コンクール入賞住宅の分布

方で、スプロールが起きやすい中心地区周辺に対しては、外周部の3個所の拠点をスプロールに対抗する公園緑地ゾーンとして提案した。(図2)その一つが八幡公園整備(写真1)であり、蔵し館前ひろばと合わせて、町に新しい回遊性をもたらした。(図8)

マスターplanでは、道路網を段階的に捉え直し道路舗装の整備方針を提案し、さらに各交差点を中心に町角や道筋各所の修景整備計画を提案した。

#### ・裏から始めた中心地区の整備

マスターplanに基づく計画は、東北電力との調整がつかないこともあって、町の裏側から始められた。裏道の整備では、傍らを流れる水路際を全て石積みに変えている。また裏道の沿道建物の修景のために、町道の経路を変更し植栽を施したり、国道13号線沿いの修景のためにメープルを植えるなど、即地的な工夫も各所で行っている。また八幡公園、蔵史館ひろばの整備では、農業用水を利用した池を新たに連続して設け、町の中心十日町通りまで水を引き込む設計とした。町中の親水性を高める工夫である。

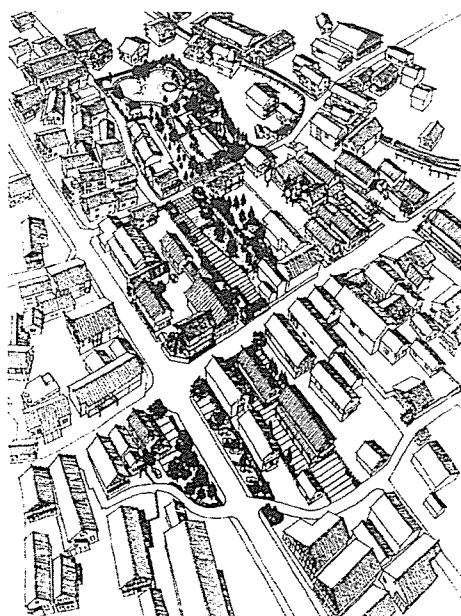
一方、伝統的な家屋の再利用も進められ、旧蔵2軒が改修され、町の商工会館と音楽会や展覧会など多目的に使える“蔵史館”(写真2)に生まれ変わっている。さらに構造が痛んでいた旧郵便局は、旧様式を守りながら建て替えられ、交流サロン「ぼすと」として、婦人サークル活動に利用されている。(写真3)

さらに最近、中心地区西側に流れる金山川に屋根付き歩道橋“きごろ橋”(写真4)が完成した。このことによって、これまで離れていた

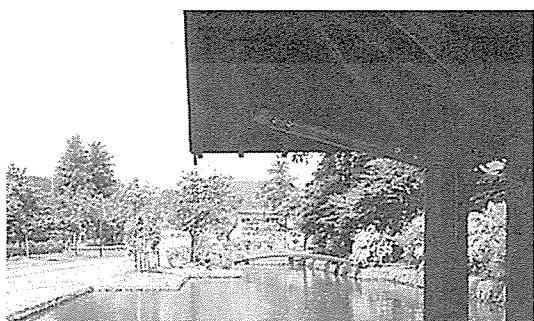
郊外の羽場地区と中心地区との結びつきが強まり、同地区的公園整備が模索されるようになった。

#### ●これからも続けること！

すでに関わってから、20年の歳月が経っている。実は成果が見えてきたのは、この1?2年のことである。従って、同じことを継続していくことがこれから課題であることに変わりはない。それには住宅デザインや便利な家づくり情報の氾濫を越えて、次世代が杉の家を望み住み続けることが前提となる。そして町づくりを進めていく町民と行政も次世代を育てていかなければならない。最近、次へのステップを模索する委員会が発足したのは、何よりも頼もしいニュースである。



・図8 中心市街地アツメ



・写真1 八幡公園（設計：片山和俊）



・写真2 蔵史館（設計：林寛治）



・写真3 郵便局「ぼすと」内部（設計：林寛治）



・写真4 屋根付橋きごろ橋（設計：片山和俊）

## 吉田慎悟

SHINGO YOSHIDA  
色彩計画家

ウェールズの黒いまち

## ■天然スレートの家並み…宮城県・登米町

“地場産材と景観”的取材のために、杉を生かしたまちづくりを進める山形県の金山町、木造三階建て温泉旅館が建ち並ぶ銀山温泉、そして天然スレートを葺いた建物が多く残る宮城县の登米町を歩いた。登米町では黒い天然スレートを葺いた家を見ることができる。地場で産出する天然スレートは、昔は瓦よりも安く、多くの家の屋根に葺かれており、特徴的な景色をつくっていたが、現在では登米町の屋根材は金属板や瓦に変わっている。石材屋を訪れてみたが、そこには外国産の石材が積まれていた。現在では地場の石材は切り出しておらず、屋根材は瓦や金属板に変わってしまった。天然スレートを屋根材として使用しているまちは日本ではそれほど多くはないと思うが、海外では天然スレートを葺いたまち並みを多く見掛ける。

登米町の天然スレート葺きの屋根を見ていて、同じように黒い天然スレートを建材としている北ウェールズのまち並みを思い出した。

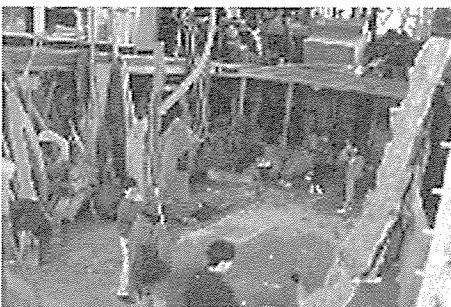
## ■北ウェールズのスレートのまち

北ウェールズの小さなまちポースマドック(Porthmadog)とブライナイ・フェスティニヨグ(Blaenau Ffestiniog)を訪れたのはもうだいぶ前のことになってしまったが、一週間ほど滞在したのでよく覚えている。ブライナイ・フェスティニヨグには有名な木の彫刻家、デイヴィッド・ナッシュ(David Nash)が住んでおり、精力的に作品を制作している。私達は彼が行っている環境ワークショップに参加するためにレンタカーを借りてロンドンからの旅を楽しみながら数日かけてポースマドックに入った(写真①～③)。

ワークショップのための宿舎はポースマドックの



・写真① 製作中のナッシュ



・写真② ナッシュのアトリエ



・写真③

まちから少し離れた森の入り口にあり、多少精神的な障害のある子供たちが通うシャタイナースクールと隣接していた。

「地場産材と景観」という今回のテーマからはずれるが、この環境ワークショップはとても興味深かったので少し紹介しておきたい。デイヴィッド・ナッシュはブライナイ・フェスティニヨグを活動拠点としており、古い教会を改造したアトリエは多くの木の彫刻で埋まっていた。彼は彫刻家であるが、単に木材に形を掘り込んでいくだけの作家ではない。森に円形にトネリコの木を植え、手入れをしながら成長する生きた木でドームをつくる“アッシュドーム”や切り株を球形に彫刻して川に流し、その状態を何年も記録し続ける“ウッドウンボール”的に、場や状況をとても大切にする(写真④・⑤)。日本でも1994年に北海道の音威子府で木こり達と共にとても魅力的な作品を多くつくっている。

ワークショップの初日、ナッシュは私達が立ち入ることができる森の範囲を示した後に30cm



・写真④ アッシュドーム



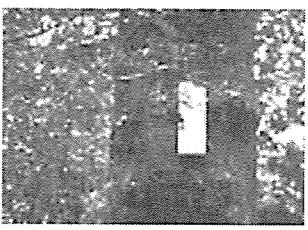
・写真⑤ ウッドウンボール

ほどの白木を全員に手渡した。最初の課題はこの白木を森の中のどこかに置いてくるというものだった。何処にどのように置けばよいのかという説明は一切ない。

私達はとにかく森に入り、黒い岩の中に白い木片を埋めてみたり、川の淀みに浮かべてみたり、はたまた宿舎の近くのゴミ箱の中に放り込



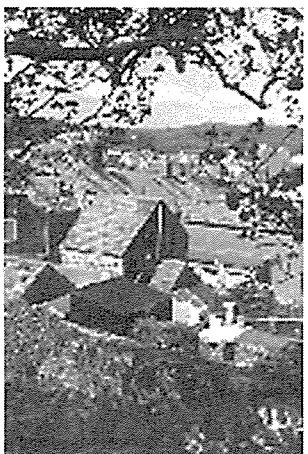
・写真⑦ 木片を使ったワークショップ



・写真⑧



・写真⑨



・写真⑩

んでみたりと試行錯誤を繰り返した。最初は軽く考えていたのだが、そのうちみんなの目つきは真剣になり、森の中の多様で豊富な場と対話をはじめる。自分の周りに拡がる環境が見え始めると、詩情溢れる作品がいくつも現れる。赤いおが屑を敷いた森の小道に向き合うように置かれた二つの白い木片は、森の妖精が小声で話し合っているように見える。岩の上に微妙なバランスで立っている木片は生きていて一生懸命に平衡をとっているようにも見える。この課題はとてもシンプルであるが、短い時間で場の空気を読みとる面白さを私達に教えてくれた(写真⑥～⑧)。

二つ目の課題は“ボールをつくる”というものだった。サラダボールのように中に空間を有する形を森の中にある材料を使って制作する。ある人は枯れ木を使ってかごのように編んでボールをつくる、またある人は地面を掘って窪みをつくるといった具合で、各自自由に制作を進めた。この頃になるとみんな森の中のお気に入りの場所が定まってきて、次々と場と対話する作品がつくられた。そして夜にキャンドルを持って行って、このボールをライトアップした。そこには昼間とは異なるとても幻想的な景色が浮かび上がる。私達はナッシュが提示する課題に夢中になり、心地よい疲れを感じながら夜遅くまちの酒場に出掛けついで、うまいラガーを飲み、ワークショップの意味を語り合つた。酒場からの帰り道に街路灯は全くなく、月灯りもない夜はライターの火を頼りに手探りで宿舎に戻って寝た。月の明るさを深く実感したのも、また本当に何も見えない真っ暗な闇を経験したのもこの時が始めてであったように思う。

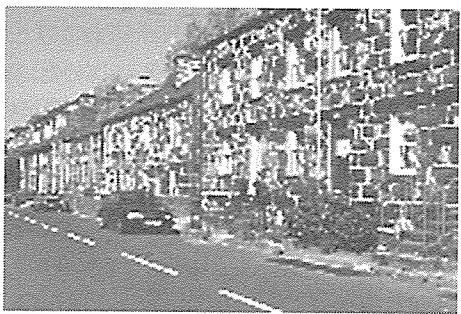
一週間ほどの短いワークショップであったが、私はここでとても多くのことを経験したように思う。ウェールズからロンドンに戻って見ると、都市の病は相当深く進行しているように思えた。

最近日本の各地で行われている市民参加のまちづくり等で、様々なワークショッププログラムが組まれている。しかしナッシュのワークショップのように参加者が自然やアートの意味を深く考え、参加者が自立するように練られているプログラムにはなかなかお目に掛からない。日本でももっとみんなが創造的になれる面白いワークショッププログラムを工夫すべきであろう。まちの人達が自立し、本当の意味で創造的にならない美しい景観を取り戻すことはできないのではないか。

## ■ 黒いまち並み

…ポースマドックとブライナイ・フェスティニヨグ

ワークショップの期間中は、作品制作に夢中でまちを見ることも忘れていた。洗濯物が貯まってコインランドリーを求めてポースマドックのまちをうろついたのは、既に数日が経った頃だった。ここは小さなまちであったが、石造りの家は堅牢で古いまち並みがよく残されていたが、これらの家には黒いスレートが使われていた(写真⑨～⑪)。



・写真⑪



・写真⑫

屋根には登米町と同様に天然スレートを割って葺いている。ポースマドックでは壁にもこの黒いスレート材が使われていたが、それは化粧材として貼られているのではなく、構造材として積まれていた。登米町の屋根材は薄く、とても華奢な感じでしたが、ポースマドックで見られる天然スレートは圧倒的な量感を持っており、真っ黒で重厚な雰囲気を漂わせていた。このまちの周辺には山々が連なっているが、むき出になつた山肌は真っ黒で、それらが屋根や壁の材料であることがわかる。

ナッシュが住んでいるブライナイ・フェスティニヨグもスレートを使った家が並んでいる(写真⑬・⑭)。

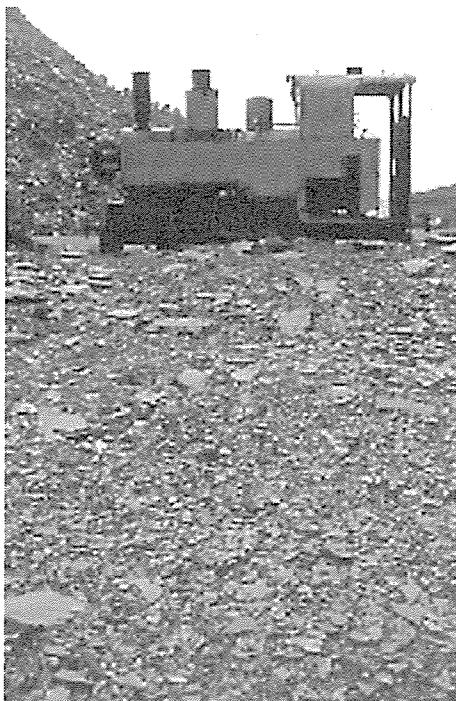


・写真⑮

彼のアトリエから庭に出るとそのまま真っ黒な山に続いている。そこは全く樹木がなく荒涼とした風景だった。その黒い山は、天然スレートの切り屑がうずたかく積まれたものであった。屋根や壁用の建材として切り出されたスレートの切り屑の山は、ワークショップが行われた豊かな緑の森と対照的であった(写真⑭～⑯)。

湿度が高く温暖な日本では緑の山は直ぐ復元するが、ウェールズでは事情が少し違うようだ。ワークショッププログラムの中には、昔のケルト人の文化を知るためにいくつかの小旅行も組まれていたが、車窓に見える景色は日本とは異なり、むき出しの岩山が広がっていた。若い木を羊が食べてしまうという話も聞いた。そこには乾いた硬い景色があり、柔らかくやさしい日本の景色に慣れた目には変化がなく退屈に感じられた。

森を大切にし、木を愛するデイヴィッド・ナッシュの興味深い作品はこのように乾いた硬い環境から生まれた。アーティストの感性は土地と深くつながっており、人と風土のかかわりの深さを感じる。



・写真⑭



・写真⑮



・写真⑯



・写真⑰

## 1. 新会員の紹介

2004年11月1日～12月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

12月31日現在の会員数は、484名です。

正会員氏名	勤務先（フロック）
寿崎かすみ	龍谷大学国際文化学部（関西）

## 2. 退会者（2004年11～12月）

西端義信（敬称略）

## 3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容（新）
井ノ上知子	オフィス I TM 〒690-0063 島根県松江市寺町198-61 寺町プラザ308 Tel. 0852-24-8023
及川 純一	(有)環境造景研究所 〒023-1124 岩手県江刺市六日町7-21 Tel. 0197-35-8617 Fax. 35-8618
佐藤 和裕	(株)三光建設 計画部 〒277-0023 千葉県柏市中央1-3-20 Tel. 04-7167-1841 Fax. 7167-1826
高倉 哲郎	(有)高倉設計事務所 〒761-0102 香川県高松市新田町甲 2106-5 Tel. 087-843-5127 Fax. 843-5128
濱田 法男	(株)都市戦略デザイン 〒542-0081 大阪市中央区南船場2-2- 14 アクティビタウン3F Tel. 06-6265-0077 Fax. 6265-0078
林 正樹	ディックスペースアメニティ(株) 〒136-0082 江東区新木場2-2-1 都市創造研究所
山崎 洋二	〒681-0021 鳥取県岩美郡岩美町大 字長谷865 Tel. 0857-72-0630 Fax. 72-0638
山本 茂	大阪大学大学院工学研究科環境・エネ ルギー工学専攻後期博士課程

## 編集後記

JUDIの取材に山形金山町を訪問、さらに登米周辺を取材しながら、地場の産業と景観の関係を仙台で議論したのが2004年の9月でした。

登米のスレートは、中国等から輸入したほうがコストが安いため、採掘されなくなり、現在のスレート屋根を修復したくてもコスト高になり、瓦に変えている現実があります。

金山町の杉と対称的でした。地場が景観をつくる。新しい景観づくりを目指す金山町の100年後が楽しみです。（櫻井淳）

## 広報・出版委員会

邑上 守正	石崎 均
澤木 俊閑	伊藤 光造
土田 旭	加茂みどり
近田 玲子	河本 一行
菅 孝能	森川 稔
中嶋 猛夫	横山あおい
櫻井 淳	吉田 慎悟
松村みち子	横山 裕
白濱 力	島 博司
中田 政廣	作山 康